

氏名	安生 成美
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 8231 号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	金石類を中心とした漢代篆書の書法史的研究

主査	筑波大学教授	博士（芸術学）	中村 伸夫
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	菅野 智明
副査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	田島 直樹
副査	盛岡大学教授	博士（芸術学）	矢野 千載

## 論文の内容の要旨

安生氏の博士学位論文は、漢代の各種金石類に施された篆書の銘文を対象とし、その書法史的な展開を横断的に考察することにより、金石類の種別を超えた、漢代篆書の普遍的な展開の規則性を明らかにしたものである。その要旨は以下のとおりである。

第1章では、金属器に鑄造・彫刻で施された銘文、いわゆる金文を対象とし、主として銅器、度量衡器、洗器の3種の篆書について、その書法史的展開を考察している。その結果、総じて初期には秦代の小篆の書風を継承するが、次第に筆画を屈曲し、字座の広狭に変化をもたせる独自の傾向が現れることを導いている。また、図像とともに配される洗器の篆書は、図像との調和を図るべく、装飾的な筆画が随所に現れることも、あわせて指摘している。

第2章では、印章、特に当時私的に用いられた私印を対象とし、そこに施された篆書の書法史的展開を考察している。その結果、私印の篆書は、直線を中心に構成されるものと、曲線を中心とするものと、二つに大別されるが、いずれの場合でも、武帝期を中心に、対称性の厳密化や筆画による空間分割の均一化が段階的に進み、この武帝期が漢代私印の独自の様式を確立する上で、重要な過渡期であることを明らかにしている。

第3章では、軒先瓦、いわゆる瓦当を対象とし、そこに施された篆書の書法史的展開を考察している。その結果、瓦当文の篆書は、時系列的に見ると「正面型」「傾斜混在型」「扇状型」の3種の類型を辿って変遷しており、特に時代の下った扇状型に、瓦当文独自の様式が開花したことを明らかにしている。また、一部の瓦当文は紋様とともに配され、それとの調和を図るべく、筆画の減少や幾何学紋様のような変化が現れる点も指摘している。

第4章では、主に墓室の資材として用いられた磚を対象に、そこに施された篆書の書法史的展開

を考察している。その結果、博において大きな一類をなす有紀年博では、第1期（元鼎～元寿）、第2期（天鳳～元初）、第3期（永寧～建安）という3期による変遷が認められることを明らかにしており、概ね前代の小篆に則る第1期から、屈曲させた筆画を字面に巡らせる第2期を経て、直線を主体とした構成により方形で簡素な書風をもたらす第3期に至ることを提起している。また、吉祥博と称される一類では、単純な形状の要素を反復させつつ字形の装飾化を図る点に、この博の共通の特徴を見出している。

第5章では、鏡を対象とし、そこに施された篆書の書法的展開を考察している。鏡の年代的区分は、既に先行研究によって、銘文の内容や鏡の形状・紋様に基づき6期に区分されている。本章では、この説を踏まえつつ、銘文の書法に基づき新たに5期に区分できることを提起している。その上で、時代が下るほど筆画の紋様化など装飾的な造形が目立つようになり、その動きは、鏡の紋様の多様な展開を補うように、紋様との密接な呼応が認められることを明らかにしている。

第6章では、碑碣を対象とし、そこに施された篆書について書法史展開を考察している。本章では特に代表的な篆書碑碣である嵩山少室石闕銘、嵩山開母廟石闕銘、袁安碑、袁敞碑を中心に分析し、それらが、秦代の小篆の書風から、外形の縦横比や長脚の比率、横画の撓み、起筆・収筆の抑揚などの点で変化している点を導いている。更に、本省では碑に備わる額の篆書も分析し、それらを秦篆系、漢篆系、方筆系と分類した上で、特に漢篆系の書風が、碑碣の篆書の特徴を更に強調させていることを明らかにしている。

第7章は、本論文の総括として、上記の各章で検討した成果をまとめ、金石の種別を超えて、それぞれの篆書にいかなる書法的展開の共通性が認められるのかを考察している。その結果、大よそ共通して認められる書法上の特徴として、空間分割の細分化、隸意に由来する線の撓み、字座の広狭という章法の変化、一定の空間の確保、紋様化、章法の統一などの諸点を典型的に提起している。その上で、これらの典型的特徴は、その時系列的な現れ方に傾向があり、空間分割の細分化、線の撓み、章法の変化という、言わば繁雑化の傾向は、比較的早期に起り、一定空間の確保、紋様化、章法の画一化という、言わば簡素化の傾向は、繁雑化の後に起ることを明らかにしている。

また、一部の金石に施される紋様との関連から、紋様の意匠が多方面に隆盛する期間は、書法における繁雑化は抑制的になるなど、紋様との関連が漢代篆書の展開において重要な要素である点も指摘している。

## 審査の結果の要旨

### （批評）

従来の漢代書法史研究では、時に実用書体として急速に普及した隸書を対象とするものが大半であり、この時期の篆書を包括的な視野から書法的に跡付ける研究は極めて乏しかった。ここにおいて、往時の標準書体の後代における命脈という視点から、漢代篆書に着眼した著者の独創性は、まず評価する必要がある。

こうした問題を解決するに際し、著者は該当する作例を関連文献とともに広く渉猟し、それらの書法的な分析と時系列的な整理を丹念に行っている。そこから導き出された各種篆書の書法的跡付けは、極めて精緻で説得力に富んだものとなっている。

更に、そうした分析結果から著者が試みた、金石の種別を超えた書法的傾向の体系化は、従来の漢代書法史研究では全く着手されておらず、本論文が漢代書法史における篆書研究において、最先端の成果を提示していることは明らかである。当該領域に新たな沃野を拓いた先駆的成果として、本論文は高く評価される。

平成29年1月18日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。